

## 第5回：ヘルシンキ盲導犬養成学校



オスロとス  
ドの盲導犬訓練は、第二次世  
トックホルム  
は異常気象の  
真夏日だった  
が、ここヘル  
シンキに来て、  
ようやく平均  
気温。十二度  
ぐらいで、肌  
寒い風がざわ  
めく中、郊外  
の盲導犬養成  
学校に到着。  
針葉樹が立ち  
並ぶ広大な敷  
地の一面にあ  
る事務所でお  
話を聞く。  
フィンラン

界大戦の時代にさかのぼる。  
イギリスに学び、犬種は昔は  
シェパードなどが多かったが、  
最近では、ラブラドル、ラ  
ップランドなどが主流である。  
最初の六カ月はポランティ  
アの家に預ける。その間は特  
別な訓練などはせず、トイレ  
などの簡単な躰でよいそうで、  
深い愛情をかけて育ててもら  
う。次の六カ月でそれぞれの  
個性をみて、その犬に合った  
訓練をする。そのまた次の六  
カ月はユーザーと一緒に訓練  
し、その後ユーザーの家に引  
き取られるという。ユーザー  
には、自立している大人であ  
ること、自分で動くことがで  
きることなどの条件がある。  
最も苦勞するのは「良い犬  
を手に入れること」で、良い  
犬とは、遺伝的病気がないこ  
と、勇気があること、その上



盲導犬養成学校の管理棟

冷静であること。また骨格も  
見るそうだ。そんなにして育  
てても、ユーザーの性格とび  
ったり合う犬は全体の半分以  
下だという。年間だいたい三  
十五頭ほどを育てており、去  
年は三十二頭だったという。  
現在、フィンランドの聴覚  
障害者は約一万人おり、対し  
て盲導犬の数は二百十頭で、  
四十人のユーザー待機者がい  
る。この盲導犬は貸し出しの  
みで、買取りはできない。ま  
た、運営資金は病院が担当し、  
公立病院が全額負担する。年  
間維持費は一万ユーロ（約一  
億四千万円）、スタッフは八  
人の訓練士と小屋を管理する  
ための六人、計十四人で運営  
されている。  
説明の後、管理棟を見せて  
もらうことになった。入口を  
開けると、突然一匹の犬が飛  
び出してきた。まだ、一年に  
はなっていないようで、外が  
楽しいらしいが、あえなく捕  
まっって中へ入れられた。中  
スタッフルームと医務室兼研  
究室があり、優秀な犬の精子  
が凍結保存されていた。日本  
からも取り寄せているという  
ことであつた。病気や怪我を  
した犬たちの部屋（といって  
も檻だが）があり、カメラで  
二十四時間見ることができ  
る。成犬がいる棟と、仔犬たちの  
棟が分かれている。消毒と靴  
のカバーをしてから仔犬の棟

に入ると、黒とベージュのラ  
ブラドルが無邪気にまどわ  
り付いてくる。このラブラド  
ールは日本から来たというこ  
とで、まだ見知らぬ土地に馴  
染めないのか、少し緊張した  
様子でおとなしくしていた。  
盲導犬として訓練される犬  
は、あらかじめ去勢または避  
妊を施される。犬は一番長く  
人間と一緒にいる動物といわ  
れているが、使命とはいえ、  
優秀が故に始めから改造され  
る運命に心が痛んだ。優秀な  
犬でも、やはり仕事中はスト



若井議員と訓練犬

レスがたまることもあるそう  
で、ときどき仲間と切り  
走らせたりしてストレス解消  
に努めているそうである。  
彼ら盲導犬は十二歳ぐらい  
で引退する。任務を終えても、  
ユーザーはそのまま手元に置  
き、新たな盲導犬とともに亡  
くなるまで一緒に生活する。  
日本では、引退後はポランテ  
ィアに引き取られて余生を送  
る。フィンランドのユーザー  
の人たちは「ずっと役に立っ  
てくれた犬を手放すにはし  
びないから」ということであ  
つた。どちらが良いとは一概  
には言えないが、家族の一員  
として最後まで生活を共にす  
る北欧のユーザーの愛情の深  
さに感銘を受けた。動物、そ  
して自然との共生の「こころ」  
を共通の価値観として、大切  
に育んできた歴史が人々の間  
に脈々と息づいていた。